

外来がん化学療法の受診間隔における薬局薬剤師の介入と医療連携の効果

井上 祥平¹⁾、渡邊 尚也²⁾、片山 珠季³⁾、永野 悠馬⁴⁾、前田 守⁴⁾、
長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、金剛圭佑⁵⁾、大石 美也⁴⁾

- 1)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 ポートアイランド店
- 2)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 岡大病院店
- 3)(株)アインファーマシーズ
- 4)(株)アインホールディングス
- 5)神戸低侵襲がん医療センター 薬剤部

【目的】 外来がん化学療法患者が安全かつ効果的な治療を継続できるためには、薬局薬剤師による受診間隔の電話確認(以下、服薬 FU とする)と医療機関への情報提供の実施が欠かせない。そこで、当薬局で実施した服薬 FU の事例から、薬局薬剤師が果たすべき役割を検討した。

【方法】 2020 年 10 から 12 月に当薬局で外来がん化学療法患者を対象に服薬 FU を実施した事例から、医療機関への情報提供で副作用軽減等に至った事例を抽出した本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0111)。

【事例 1】 50 歳代女性の肺がん患者にダコミチニブが初めて処方された 20 日後、服薬 FU にて爪囲炎を確認した。出血もあり、CTCAE の Grade2 相当と判断し、文書で処方医に情報共有を行った。9 日後の次回診察時にフルドロキシコルチド貼付剤が追加された。

【事例 2】 ゲフィチニブ、オピオイド、ナルデメジンを併用する 60 歳代女性の肺がん患者が初来局した際、便秘を確認した。来局から 16 日後に実施した服薬 FU で便秘悪化を確認し、文書で処方医に情報共有を行い、下剤、浣腸の追加を提案した。12 日後の次回診察時にグリセリン浣腸が追加され、その 5 日後の服薬 FU で改善傾向であることを聴取した。

【考察】 当薬局では、主応需病院(神戸低侵襲がん医療センター)のケモカンファレンスで毎日情報共有を行っている。また、服薬 FU の際に確認した、副作用が疑われる症状等は翌受診前までに情報を共有している。情報共有文書は、当薬局と病院が一緒に内容を改編し、誰でも副作用を Grade 評価できる。本事例では、医療機関との連携強化、副作用評価の均てん化、積極的な服薬 FU が、副作用の早期発見につな

がり、安全な治療の継続に貢献した。服薬FUから医療機関へのエビデンスのある情報提供を繰り返し実施することで、患者により安全な外来がん化学療法を提供でき、薬局薬剤師の重要な役割のひとつであると考えらる。

(第31回医療薬学会年会(2021年10月, Web)にて発表, 一部要約)